

新 おおさか KEYわーど 【第5回】

三方が山で一方が海 ランドマークは生駒山

夏になると、昔の心齋橋での夕涼みを描いた一枚の木版口絵がふと浮かぶ。『畿内見物 大阪之巻』に洋画家中澤弘光(1874~1964)が描いたものだ(表紙)。

出版元の金尾文淵堂は、もとは心齋橋筋にあった書店で、金尾種次郎(1879~1947)の代に文芸書に力を入れ、一時期、東京に移転する。与謝野晶子や徳富蘆花とも交流し、装釘や木版口絵にこだわった、ため息の出るほど美しい本を出版している。口絵の心齋橋は、明治42(1909)年に架けかえられた石橋で、本書は大正元(1912)年に発行されているので、当時最新の現代風景を題材としたことになる。しかし、どこかノスタルジックでもあり、故郷心齋橋の夕涼みに種次郎も郷愁を感じたかもしれない。

暮れて間もないのだろう、私がこの口絵にこだわるのは、ガス燈が灯り、空に星が瞬きはじめた宵闇の向こうに、山のシルエットが見えている点である。なだらかな曲線はどここの山だろう。大阪人なら「知ってますわ」という方も多いはずだ。

この山影は生駒山である。現在は市内各所に高層建築が建ち並んで視界をさえぎり、都心から周囲の山並みが望まれた記憶が失われているが、この絵には、上町台地の向こう遠く、その稜線がはっきりと刻まれているのである。

確かに少年時代、心齋橋からテレビ塔が建ち並ぶ生駒の山頂が見えた。いや、最近まで見えていた気がする。長堀橋の交差点付近からは、今も堺筋の真南に和泉山脈が見えるし、かつて北側には北摂の山並みが、シルエットのように見えていたと記憶する。生駒以外でも六甲山や二上山、葛城金剛といった個性ある山容を目印に、大阪の都心で自分がいまどの辺りにいるか確認することができた。

京都は三方が山に囲まれ「四神相応」の土地とされる



生駒山遠望(大阪駅前第3ビルより)

が、大阪も生駒山や和泉山脈、北摂山系など摂河泉の山々に囲まれ、西が海に開けている。周囲の自然を日々それとなく意識して暮らす。それがかつての大阪の街の暮らし、原風景だった気がする。

大阪を取り囲む山の記憶で忘れがたいのが、少年時代に四ツ橋の大阪市立電気科学館(現在は中之島へ移転した大阪市立科学館)で見たプラネタリウムである。



プラネタリウムのスクリーンに浮かぶ山並みのシルエット・1980年11月(提供:大阪市立科学館)

現在は、写真画像を用いて明るい街の夜もスクリーンに投影できるが、当時は「天象館」と呼ばれたドーム内につくられた架空の空の地平の位置に、電気科学館から四方を眺めた形で、大阪の街並みや主要な建築、山並みがつくられていた。素材は何だったのか、テープを貼り重ねたような黒いシルエットが、ぐるりと観覧席を囲んでいた。

カールツァイスII型の天体映写機(現・大阪市指定文化財)による投影がはじまると、六甲山や淡路島の黒いシルエットに夕日が沈み、満天の星の世界を満喫した後、生駒や二上山のシルエットから朝日が昇ってきた。私が生駒山のシルエットにこだわるのは、ここでの体験も影響しているのかもしれない。

もうひとつ、大学浪人中に京都の上醍醐(京都市伏見区)に登ったとき、山頂より少し離れた車道から展望が開け、西日に大阪湾がギラギラ反射するなか、梅田界限の高層建築の影が逆光にゆらいで見えた。その印象が強くて、比叡山や上醍醐など大阪から見える京都の山々も気になっている。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長/大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ増殖するマンモス/モダン都市の現像一』(創元社)など。